

中世の歴史を活かす世界遺産アマルフィ



現代アートによる島おこしが注目される瀬戸内海



Yayoi Kusama: Pumpkin Photo: Shigeo Anzai

国際シンポジウム「瀬戸内海 未来から見た風景」(山陽新聞社、山陽放送、福武教育文化振興財団主催)が3月14日(土)山陽新聞社さん太ホールで開かれ、会場を埋めた300人の参加者と共に瀬戸内海の未来像を考えました。

まず基調講演の最初に登場した日本の古代文学研究の第一人者・中西進さんによる「瞑想の海」。16時間30分もかけて南イタリアのアマルフィから来岡していただいた歴史研究家のジュセッペ・ガルガーノさんによる「地中海・海洋都市の歴史」。イタリア建築・都市史を専門とする法政大学教授の陣内秀信さんからは「南イタリアの歴史を活かした町づくり」。瀬戸内国際芸術祭の総合プロデューサーで、直島福武美術館財団の理事長であり、当財団の理事長でもある福武総一郎さんからは「地域から世界へ発信」とそれぞれのテーマを提示いただきました。その後岡山大学学長の千葉喬三さんによるコーディネートでパネルディスカッションが展開され地中海と比較しながら来年開催される瀬戸内国際芸術祭や歴史の上に構築される文化のあり方などについて意見交換が行われました。

シンポジウムの模様は山陽新聞では3月23日に特集で掲載され、山陽放送では3月29日の深夜に特別番組として放送されました。



全プログラム終了 ほっと一息！
アマルフィのリモンチェッロで乾杯

平成21年度 教育研究助成対象者が決定いたしました！

教育研究助成審査委員会を去る2月26日市内ホテルで開催し、厳正な審査の結果、平成21年度の助成対象者が決定いたしました。贈呈式および教育研究発表会は7月に開催する予定です。

助成件数：55件（応募件数95件）
助成総額：1,125万円
助成期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

平成21年度 文化活動助成対象者が決定いたしました！

文化活動助成審査委員会を去る3月6日市内ホテルで開催し、厳正な審査の結果、平成21年度の助成対象者が決定いたしました。贈呈式および文化発表会は9月に開催する予定です。

助成件数：94件（応募件数132件）
助成総額：1,695万円
助成期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

平成21年度事業計画

平成20年度第2回理事会・評議員会を去る3月23日に開催し、平成21年度の事業計画および予算が決定いたしました。概要は以下の通り。

表彰事業

福武哲彦教育賞および谷口澄夫教育奨励賞の贈賞、福武文化賞および福武文化奨励賞の贈賞、各賞受賞者発表会の開催、福武教育文化叢書の発刊

教育文化に関する助成事業

- 教育関連事業助成
教育研究助成（公募）、研究大会助成（公募）、学力・人間力育成推進事業助成、個性的教育の推進地区・校への助成（公募）、学力向上を目指す学習サポーター助成、特定教育助成、英語研修助成、その他の助成
- 文化関連事業助成
文化活動助成（公募）、特定文化助成、瀬戸内文化育成助成、指定文化財保全助成、その他の助成

国際的人材育成事業

海外教育事情調査、世界に通用する若者の人材育成事業、日中青年交流事業への助成

その他の公益事業

講演会開催事業、広報事業、調査研究事業、瀬戸内国際芸術祭関連事業、25周年記念事業、その他の事業

* 詳しくは当財団のホームページをご覧ください。

ホームページアドレス <http://www.fukutake.or.jp/>



[特集2] [特集1]

犬 決

第二期プロジェクト
未来に向けて 犬島からのメッセージ

第二十三回 福武哲彦教育賞
第九回 谷口澄夫教育奨励賞

島 定

★岡山市立灘崎小学校迫川分校を訪ねて★瀬戸内海の未来像は！
地中海と比較 国際シンポで探る★平成二十一年度 教育研究・文化活動助成対象者決定★平成二十一年度事業計画

岡山市立灘崎小学校迫川分校を訪ねて

平成21年4月1日より岡山市は政令指定都市となる。そんな岡山市内に児童数30人以下の分校がある。岡山市立灘崎小学校迫川(はざかわ)分校である。学区は、岡山市の最南西部に位置しJ R宇野線を挟んで常山山系南側の古くから開けた谷間の土地からなり、米麦・果樹等を生産する農業地域である。分校の近くにはJ R迫川駅があるが、



迫川駅より常山を臨む

この駅舎はその昔由加駅と称し、由加山参詣の玄関口であった。そのため現在も由加山へ至る参道沿いにはかなり奥まで集落がある。歴史的背景や奥迫川から本校に通う負担の大き

さ等から、奥迫川区・茂曾路区・迫川区の1～3年生29人(平成20年5月1日現在)が分校へ通学している。4年生以上は分校から約2キロ離れた本校(灘崎小学校)へ通う。

迫川分校は、地域の人々と温かい心通う交流をしている学校であった。取材した中からそのいくつかを紹介したい。

迫川分校の春は、約40人の「ご近所スクラム隊」のみなさんとの対面式から始まる。これは防犯協議会の方々を中心とした組織である。「校門から戸口まで」を合言葉に、児童の下校に付き添ったり、昔遊びを教えたりして下さっており、この世代を超えた人々との触れ合いが分校を支えているのである。

さて、3年生が取り組んでいる学習に「どてカボチャ栽培」がある。品評会ではライバルにもなる地域の方の指導によるものである。8月末には「どてカボチャ品評会」があるが、ベテランカボチャ栽培者たちの中で堂々78kgの重量で6位入賞を果たしたこともあるという。受粉が難しい上に、水やり、イノシシ対策を考えながらの長期にわたる栽培経験は児童たちに大きな達成感を与えている。

分校の元気は、

地域の元気



サクラランボの蕾と分校全景

地域の方をゲストティーチャーにした学習は3年生に限らず学年に応じて「迫川自慢」「大山桜祭り」「迫川の獅子舞」「お守り作り名人」「うどん作り名人」「さつまいも名人」「昔遊び」などの単元を組み、地域学習を深めている。

先生方も少人数故にできる機動性を活かした学習形態を工夫したり、異学年との合同学習を指導実践したりしている。また全校児童を「チームはざかわっ子」という縦割りの4チームで編成している。4チームのそれぞれの名前は「図書チーム」「給食チーム」「なかよしチーム」「元気チーム」である。通常は5・6年生高学年児童が行う委員会組織であるが、ここでは3年生がリーダーとなって最上級生の自覚をもって学校生活を活気あるものに行っている。

このように地域から愛され世代を越えた人々との触れ合いをたいせつにしている分校であるが、優しさを受けただけではなく、分校からも積極的に行事に参加したり情報を発信しようとする姿勢は素晴らしい。今後とも地域と手を携えて歴史と伝統を大切にしつつ元気な声の響く学校であって欲しい。(赤松康弘)

★ひとことメモ

【大山桜】について

岡山市灘崎町奥迫川の陀婆山(ださやま)の急斜面に岡山県内でも有数の巨樹で樹齢500年の桜の木がある。標高150mの急斜面に立っており、樹高20m・枝張り27m・根回り7～9m。約8本の株から形成され岡山県天然記念物指定されている。4月4・5日には「桜祭り」を地域上げて開催する。



どてカボチャ

Cover Photograph

「白魚をとる舟」(緑川洋一)



春の味—白魚

この作品は瀬戸内の高梁川河口付近で撮影した1枚です。まず白魚漁の舟の群れをリスフィルムに焼付け、それに春の海を重ねて写す特殊撮影で仕上げられています。

この撮影の前だったか、後だったか。春夜の帳が下りるころ、父に誘われて家族で白魚料理を食べに行きました。付きだし、から揚げ、さしみ、吸い物、天ぷら、黄にらとの玉子とじ・・・。最初はさっぱりして、癖のない味と感じていましたが、余りの白魚づくしに食傷気味。"美味しいものは、少し足りないくらいが"と言ったとたん、「贅沢を言うな」と父に叱られたことを思い出します。白魚は私にとってほろ苦い春の味でもあります。

父は食事の時間を大切に、大勢で賑やかに食べるのが好きでした。器や盛り付けにこだわり、甘辛い関東風の味付けを好み、緑山荘(邑久町の高台にある別荘)で春は花見、秋は月見の宴を催していました。目の前は瀬戸内海のパノラマ。父の眼にはいつも瀬戸内海が映っていました。(長女・西 瑞子)

Editor's comments

* 今年度の福武哲彦教育賞は高校、大学での教育と共に、終戦直後の幣原内閣の戦後処理を記録した次田大三郎、ロシアの文豪トルストイと日本人として初めて交流した小西増太郎岡山の先人の発掘に努めた太田健一氏と小学2年生のとき失明しながら盲学校から東京教育大学に進み、念願の教師に就任。定年後はアジアの子ども達のための盲学校建設を目指して活躍する竹内昌彦氏に贈られることになりました。また谷口澄夫教育奨励賞には「書の甲子園」といわれる国際高校生選抜書展で明誠学院高校を全国優勝に導くなど岡山の高校生の書のレベル向上に尽くした菅井淳さん個人3名、団体2件が選ばれました。おめでとうございます。

* 3月14日(土)に山陽新聞社さん太ホールで開催された国際シンポジウム「瀬戸内海 未来から見た風景」は、山陽新聞社、山陽放送と財団が主催する初めての試みでした。講演はテーマに沿って事前取材した映像を提示した後本題に入るというメディアの特性を生かした手法を展開しました。最近ではパワーポイントによる講演が増えているだけに、こうしたムービー映像でテーマを浮き立たせるビジュアルなシンポジウムが今後増加しそうです。

* 今号の表紙を飾った緑川洋一さんの作品は「白魚をとる舟」。長女の瑞子さんにとって白魚は、ほろ苦い春の味だったそうです。親子の会話も聞こえそうな素敵な作品です。

* 特集の「学校訪問」では、政令指定都市に存在する元気な分校の様子を紹介することが出来ました。分校の子どもたちから都市化と教育について深く考える機会を与えていただきました。(S)

季刊

不_易

F U E K I vol.34 2009.4.25

財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190

http://www.fukutake.or.jp/

制作 株式会社 吉備人

デザイン 田中健一郎(QUA DESIGN style)

未来に向けて

犬島からのメッセージ

犬島アートプロジェクト「精錬所」が公開されて2年目となる2009年の春、同プロジェクトの第2期工事が発表されました。直島福武美術館財団(理事長・福武総一郎ベネッセコーポレーション会長兼CEO)が瀬戸内海の島々で展開するプロジェクトの一環で、現代アートで過疎の島を活性化させる試みです。

第2期のプロジェクトでは、島内の空き家や空き地をインベーションし、現代アートを展示するギャラリーに再生します。ギャラリーは、島の中を回遊しながら鑑賞できるように点在し、犬島の港を中心に10ヵ所程度が造られる予定です。人々を感動させ魅了させる力や地域の魅力や価値を高める力を持つアートによって、犬島の自然や日常生活の風景をより美しいものにしようという試みです。

ギャラリーの設計は、直島の「海の駅なおしま」や金沢の21世紀美術館を手がけた建築家の妹島和世氏、アートディレクターは東京都現代美術館の長谷川祐子事業企画課長です。作品は、「精錬所」でアートワークを手がけた柳幸典氏ら複数のアーティストが手がけます。

第2期工事は、この春から3ヵ年計画で進められ、2010年、2011年、2012年と順次オープンしていきます。第1段階は、2010年7月に3ヵ所のギャラリーがオープンする予定です。よろずやだった家は、梁や柱などをそのまま生かしたギャラリーに再生され、昔のように人の出入りが始まりま

す。また、壁にアクリル板を使用した建築物では、ギャラリーの内や外から景色を透視したり、アクリル板に映し出された島の風景やその中にたたく自分の姿を楽しんだりドラマチックな情景が展開されそうです。

使用する素材は、もともと島にある石やスラグなどの資源と新たに持ち込む素材があります。新たに持ち込む素材は、地域の素材と合うよう色や質感に焦点をあて、ガラスやアルミ金属が使用されます。

2008年4月にオープンした第1期プロジェクトである「精錬所」の入場者は1万人を超え、ガイドボランティアや島の緑化に協力するなど島民からのアプローチも始まりました。何か新しい形のコミュニティがみえ始めてきたように感じます。

長谷川氏は「みんなと一体になれるアートを、みんなとともに考え、相乗効果を大切にしたい。犬島アートプロジェクトは、未来に向けての豊かなメッセージです」と語っています。島にある自然や生活を活かし、現代アートによって何が生まれるのか、期待に胸が高まります。(和田広子)



© KAZUYO SEJIMA & ASSOCIATES



犬島:岡山市唯一の有人島。面積0.6km²、周囲4km、37世帯、人口55名(平成21年1月末現在)

今年は、精錬所ができて100年になる。



岡山県の教育の向上に貢献した個人や団体を顕彰する第23回福武哲彦教育賞、第9回谷口澄夫教育奨励賞の選考委員会が3月27日岡山市内のホテルで開かれ、厳正な審査の結果、教育賞に2個人、奨励賞に3個人2団体が決定しました

贈賞式は、5月18日(月)に岡山プラザホテルで行う予定です。

【福武哲彦教育賞】

太田健一氏

(山陽学園大学 特別任用教員/岡山市在住)



明治維新、地租改正、地主制の研究者として頭角を現し、昭和56年に発刊した「日本地主制設立過程の研究」は輝かしい成果として学会の注目を集めました。また、埋もれた岡山の先人の発掘や原資料の研究、紹介においても多大な業績を残し、高校、大学勤務の傍ら、数十年にわたって続けている地域史の調査、研究の成果は高く評価されています。

竹内昌彦氏

(岡山県立岡山盲学校 講師/岡山市在住)



小学校2年生のとき失明。盲学校から東京教育大学へ進学。昭和43年卒業と同時に盲学校の教諭に就任。平成11年から6年間、教頭としての職務を全うし、退職後も自身の体験をもとにした講演活動が続け、多くの人々に感動を与えています。遅れているアジアの目の不自由な子どもたちのための盲学校建設に意欲を燃やす献身的努力も高く評価されました。

決

福武哲彦教育賞に太田健一氏、竹内昌彦氏
谷口澄夫教育奨励賞に小野秀明氏ら三個人二団体

定

【谷口澄夫教育奨励賞】

◆ 小野秀明氏 (矢掛町立矢掛中学校 教諭/倉敷市在住)
矢掛中学校が取り組むソーシャルスキル学習やキャリア教育、いじめの防止や不登校生徒の解消について中核的役割を担い、その意欲的な活動が総合的な学習の時間を充実させ、学校力の向上につながっています。今後の活躍が大いに期待されています。

◆ 清水久仁子氏 (倉敷市立大高小学校 教諭/倉敷市在住)
特別支援教育歴30年という長年の経験を生かした指導は、多くの児童の状況改善につながり、保護者から厚い信頼が寄せられています。倉敷市の就学指導のリーダーで、専門的な知識、技能においても後輩から尊敬されており、他の教師の模範と評価されています。

◆ 筈井淳氏 (明誠学院高等学校 教諭/姫路市在住)
「自主性を重んじ、作品制作を通して人間力を鍛える」ことを第一義とした指導により、各種の書道展で生徒の作品を全国第1位に押し上げたほか、書道を通じた外国との文化交流に積極的に取り組み、県全体の書のレベルアップへの貢献も大いに期待されています。

◆ 津山市立北陵中学校吹奏楽部 (津山市)
岡山県吹奏楽コンクールで5年連続、全国大会でも3年連続金賞受賞という素晴らしい成果を挙げる一方、小学校や施設での訪問演奏や各種行事への積極的参加は地域の音楽教育に大きな役割を果たし、演奏技量のみならず生徒の生活態度についても評価されました。

◆ 特定非営利活動法人 リスタート (岡山市)
平成8年から「不登校・ひきこもり支援」を目標に活動を展開、その後支援対象をニートの若者へ広げ、就労・就学を通じた社会復帰をめざしています。現在まで延べ2,200名を対象に支援し、うち60名が社会復帰しており、今後の活動に期待が寄せられています。

創設以来の受賞者は、福武哲彦教育賞59件(26氏、33団体)、谷口澄夫教育奨励賞38件(26氏、12団体)となりました。